

今月のみことば 2017年11月

「正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される。」（詩篇34篇19節）



以下に掲げたのは、「秋吉台の聖者」と呼ばれ、大理石鉾山において、自らも厳しい仕事に従事しつつ、犯罪者を引き受けてその更生に著しい成果を残し、戦後まで日本全国に聖書のメッセージを届けた本間俊平(1873～1948)が書いた文章を現代語に直したものである。

貧しい牛乳配達夫がいた。外見も見栄えなく、早朝から晩まで働き、あちらこちらに牛乳を届けるために奔走し、その苦勞は並大抵のものではなかった。しかし、若い頃、聖書に出会い、キリストに従ってきたおかげで、その人格からは豊かな光が輝き出していた。同業者は少しでも楽をして儲けようと、さまざまな不正をしていたが、彼だけは断固としてその仲間には加わらず、本物でなければ一滴たりとも売らない、自分がこの世に来たのは、ただ牛乳を売って金儲けをするためではなく、この仕事を通して神のみこころを同胞に伝えるためである、と言ってはばからなかった。そうこうしているうちに、十数年の勤勞の結果、五百円という、当時としてはかなりの大金を蓄えた。

牧場の主人は大層感心し、牛を買い入れてみずから牧場主となって牛乳店を開いてはどうかと彼に勧め、自分が所有する最良の牛を貸与した。彼は蓄えを全部はたいて店舗を作り、いよいよ開店することになったが、その朝、乳搾りに行くと、何と牛は死んでいるではないか！しかし彼は自暴自棄になることなく牛舎の前に静かにひざまずき、このようなことが起こったのは、まさに神が自分を愛し、自分を鍛えるためであって、より大きな神のみこころを知らせるために違いないと感謝し、喜んで店をたたんだのであった。辛苦して得た大金はすでになく、なお死んだ牛の代金五百円が負債となったが、彼は直ちに元の配達の仕事にもどり、わずかな売上金ではあったが、主人への返却を怠ることなく、一年が過ぎた。

主人は、これまでの十数年の彼の生き方を見、大打撃を受けながらも失望せずに、一合の牛乳もとれないまま死んだ牛の代金を払い続ける彼の品性にいたく感服した。そして、死んだ牛の代金を払う人が生きた牛の代金を払わないわけがない、と言って、自分の会社と多くの牛をことごとく彼に引き継ぎ、無条件で彼に全権を委ねた。そのみならず、主人は自分の子供たちの教育もすべて彼に託すに至った。

彼は非常に感激し、一層仕事に励み、会社は流れの辺りに育つ樹のようにますます繁榮し、今や、世界をまたにかけて種牛の購入に奔走し、より良い牛乳の生産に従事するに至った。



同じ頃、富裕な刀剣鑑識家があった。名門の出であることを誇り、キリスト教を毛嫌いし、教会が近くに建つとそれを不快に思っただけで転居するほどであった。

ある時のこと、古い刀剣を数十円(現在の数十万円)で購入し、それを研がせたところ、数千円(現在の数千円)を払っても買えないほどの名刀であることがわかった。彼は非常に喜び、訪問客があるごとに自分の眼識を誇り、軽佻浮薄な人々を集めては宴会を開き、挙句の果てには芸妓を呼んで酒宴にふけた。

ところが、ある日のこと、庭先で遊んでいた愛娘が、芸妓の舞い騒ぐのに興味を惹かれて部屋の中に飛びこんできた。ちょうど、名刀をひねくり回して自慢していた彼に、「お父さん、それなあに?」と娘が抱きつこうとした。慌てて振り返った彼は、何と、自慢の名剣で娘の喉を刺し貫いてしまったのであった。

何十年もの辛苦の結果、ようやく店を開いて、とうとうここまで来たかと喜んだその翌朝、頼みの牛を葬る、という不幸に遭遇しながらも、神を知る者は失望しないのみか、かえって神の試練を受けられるのは幸福である、と感謝し、再び、一層の勇気をもって一からやり直さべく勤勞に就いた。それに対し、神を知らない刀剣家は思いもよらない名剣を手に入れ、自慢と欲望の果てに、可憐な愛娘を自らの手で絶命させる、という結果を引き起こし、ついに世を捨てて山僧となり一生を終えた。

このように、神を知る者の幸福と、神を知らない者の不幸と危険は、天地の差がある。後者の結末を見る時、それは哀れ、というより愚かである、と思わざるをえない。

心してイエス・キリストを受けるにまさることはない。神とはどういう御方かを知らしめ、神との間を隔てる雲霧を取り払い、罪の力を破壊して、御顔の恩光を照らそうとして来られたキリストを仰げ。その大いなる愛に感謝して、喜びつつ信じ、従う者となるように、今こそ心の扉を開くべきである。

